仮廓比翼七象

南渚ミ

特別
へ13
3633
55

藝者 竹八十

若者 源玄湊

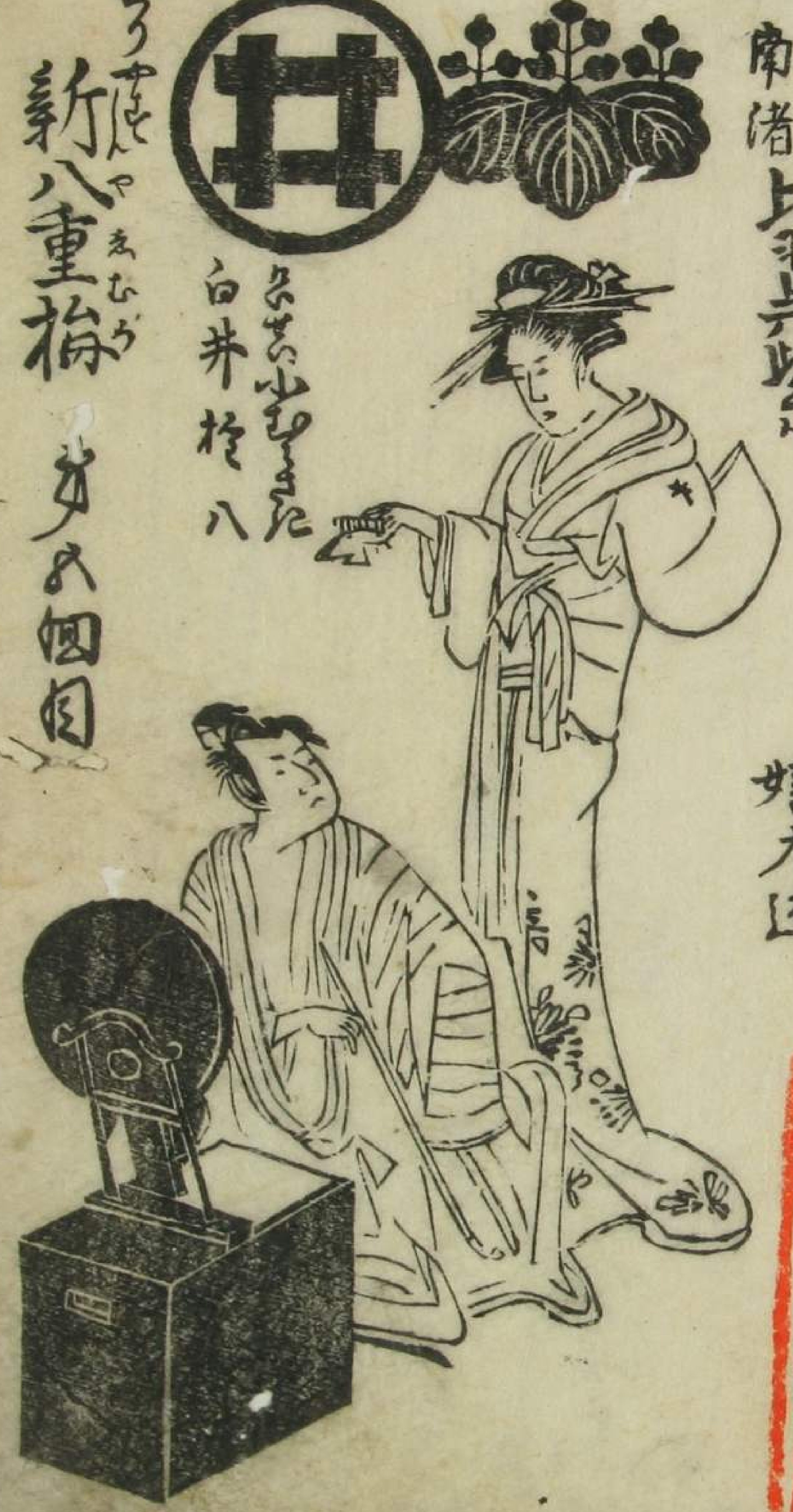
茶屋 ○○吉

市座 番頭長兵衛

傾廓

南渚 比翼紫（ひよくのむらさき）

嬉九述



名高い出むすこ 白井権八

うそはしん 新八重梅（やえむめ）

女ゑ四目

門 へ 13
號 3633
冊 55

昭和三十二年六月八日
宮川曼魚氏寄贈

自序

遠(ヱン)海(カイ)の京(ケイ)魚(キヨ)も。此(コノ)濱(ヒン)に来(キタツ)て。碑(ヒ)を須(ス)先のはちよんたれ斗進(コス)。是(コレ)通(カヨ)ふさてと。鰐(ゲケキ)ろ故(ユヱ)に。此地(チ)乃産(サン)に。簀(ス)とやそ号(ずく)。青(セイ)樓(ロウ)をさうなし。浅(アサ)草(クサ)斗その名(ナ)高(タカ)し。されバ比(ヒ)翼(ヨク)の先(セン)生(セイ)。萬(コン)也(シ)賜(キ)那ら多樒(コン)八も花(クハ)街(ケイ)斗押(アツ)んこ乎。目黒(シロ)のをそんこよ。旧(キウ)跡(セキ)也残(ノコ)さ。なんそ是(ゼ)非(ヒ)あらん

や。チト大壮なるが。嗚呼天なる哉。予モ縫女の手ふ遊んで。なんもゑもとらぬ當器ねらうた。質屋の見ツ目とやあらふ而已

於　宇田樂庵
嬉九述

于時寛政辛春
パツカリ開酉のとし

假廓（かりのくるわ）南渚（みなみのなぎさ）比翼紫（ひよくのむらさき）

總目

第一回　驚かれの喧嘩でてゝ母亡く　なるは弥子の長患

第二回　見悉しれ丁よりまさる　役宅のせつなさ

第三回　意ゆくふむ縁をつなぐむる　依常ろちくろ

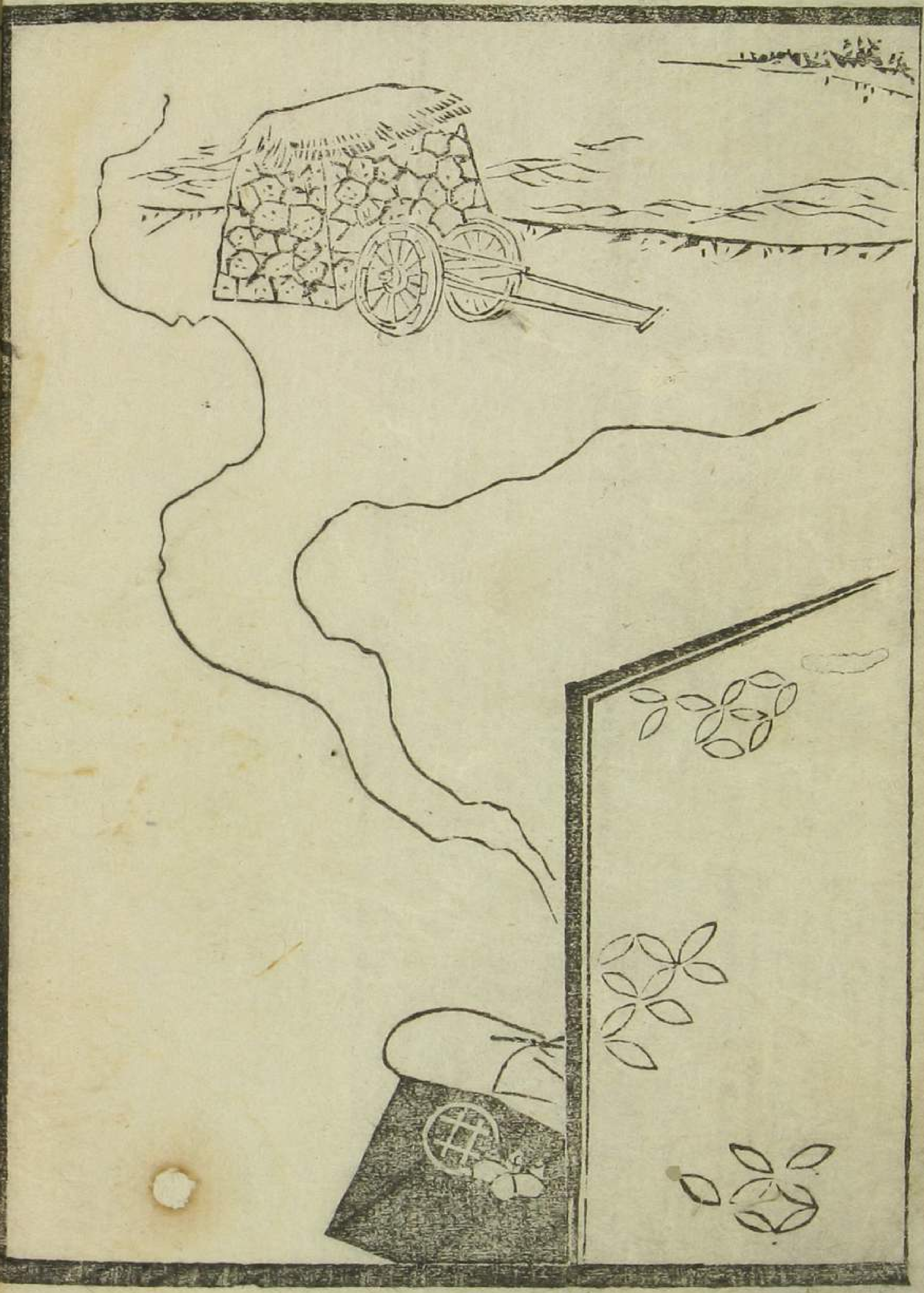
附り　女のあんきりてふうふとく　おいらんふきらうたうす

第四回　浮気ふて婚家の珍あらはす　けひせひの癖

第五回　権八が恥ええふ怨る　小むらさきか恋縁

附り　夢さめてひとりてあふれる　南客の二つひ

以上五編



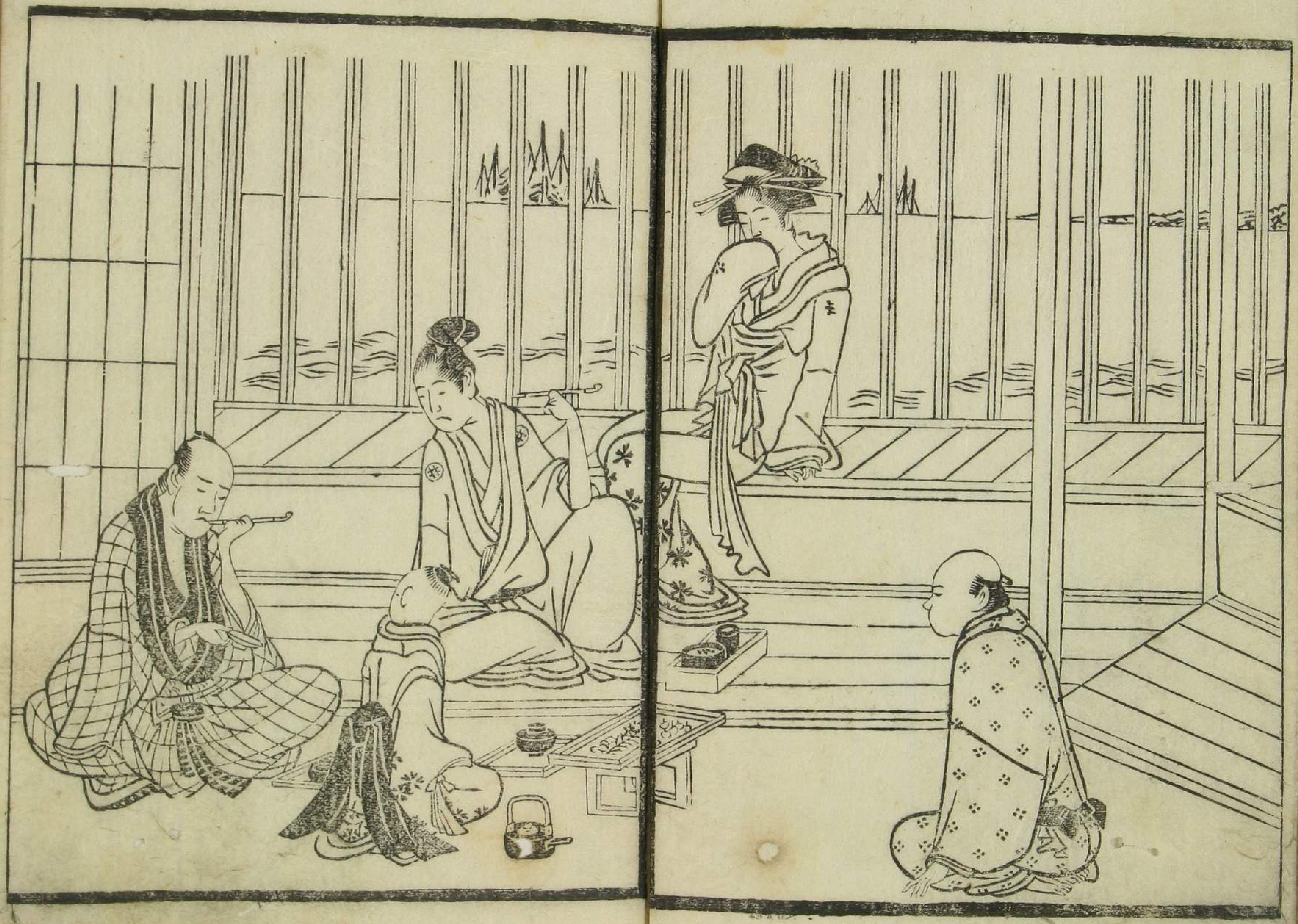
（假廓南渚）比翼紫

第一回

宇田樂庵著

右舟ふ曰く、日本橋からおつらをておさ各深川遊らんとへ、かのなれ人鶏ム の孫おかまし色宜ぶそもは深川とかうぞその昔去大ひ下、宿ふ化小中をとありさるはぶりるちをまめきうる、女郎それ

は、大なる金言（きんげん）法語を説（と）かせられしなかにはかく女房（ばう）たちのおまくさなるはいかなるゆゑやらん。答まして家（いへ）の主（あるじ）ふとふ主こそくて是は憂（うき）川柳の流（ながれ）乃身なる、傀儡（くゞつ）にていと善大なるはよし法嘱（きう）せられたりし主に作（かせ）られなひしは、かく示よき川柳のおまくさなけるゆゑ今よりは地（ち）法示川と名ふべしと仰られなひしより今にいたりて地名（ぢめい）となる（このところは大なむのうちまで示川さと乃人はまつはとふさとちぐりなふ）それ宿（しゆく）のふだりひは、のがる国主（こくしゆ）あ色ばくぞりえひきゆく若（み）あり、嶋（しな）金沢（かなさは）の社宮（やふきゆく）なれば嶋（しま）乃ぬのとそ付のぞせあそびける止（とめ）さんての君様けあ色は、ちゆりことなしの人傀（どつ）ありふられて主ふなうさきいが色てなふお宝（くわ）猿（ざる）を、みなおりひくのこび枕（まくら）げにかさ田舎（いなか）の人たちは、どうだなア、えアけエ、とんざ



と聞とおどろかさとゝ、とりあり（こふさやぞのかうより）

（かご一てうきさかくらんおん　まへのうきやのするへおろも）かご ヱおまへアヽやしさ（トかごのうしろから）

（ひぐらぞうり　を出しな跡を）客娘へ （と云へまで十七八ちとかうをぞしつざいけんなき　いろ若し中有りからそうきさぢよんのかろやくろら）

しやのありゆうとも見ゆくしハくろひらうどかれハきなぞもせうぞくするへ一全
めのハひいろのいまつまひめハくろの二分さなぞめうとももとこしもえ見らへ
あたへ紺ぞえくしのちりめんの小ゐんけいハ下若いハおんぶしまおゆぞんハちりめんの
まハしぞかりむもくろ七子のそんへりおびへえりらのかうろうかり紺こーらくのちよいと
ちくこつ紙さーと件やのせいのつのたぞこ入と丁子ちやちりめんのみがつく紙
いろちよふさげちさくる紙手ふのちおいとろごようりてそで茶やへあがり

ヲイ あね様さんや 茶や女（ミるく上てしきそて）おそよふござりまし

（トあひさろそる女房とたゞこゑんといろちよふかりてくる）客 カウ あふがあり悪も 女

ハイかへいとごろひがござりますと 客 そいつァ白アめくざらうハいゝどとむぐくがぞのうちれ紙ぶかつけてあんぞちよつひら吸（ふとら）よふふそゆくごせくてんれ様へ 女 ハイゆこまりあーとれ かご ヱとなすぐおそようござりますと 客 ヲイト（しやハせてもり）ヱアーツのんでいかつせく かご モシ ヱなとつきやア ちと、おすらがいでござりやせう 客 みせ かご ハテ常（つね）でも上百や

大石カア おのれハヤ 早とハそ〜て まいらちう
ともいそだち どうらどうきと お孫とあり
やり ニナア 梅組モレ 五路のふ一本 やるやる
[地] ハテ 川ぞいの 三丁で のつて 流れてめ
ぐらのいふ 無りふまるし 何をいつぶんへ
あるめくまァ殺人る [詞] ハテ そうおつもあり
やと知れとこのいどろくさるでも おかまり
いつて 足 やきァ ふとも まァ ちうとどいうで

あせくやまよの [地]（二のあしふみ ひとつひとつひやうのかんまくらちゆく このてにおもろ近て）
んでてみえまむりやあだんのところざまい
つらつら思ふ同居場の 札がるけアく 立場
寺ァお前ァなる そでらワるく おとさ城
たくきァアガるとうぬらが 悪性とおろさ
めそくれるぞ [詞二]（二人ながらのてんりゃうしてかしゆへたとあきれて）これ近若
まァいうと どうしてと本のはそつも殺
おくさせん 城やよさしるな コレコレ うきァおいらァ

どれどもおもハ東海道五十三次駅さん
むのありさく、おもださんで、ふじの山ろ
つき山や、江戸の郷の泉水、大井川をとゞぶ
り川とおもつてゐる、むかうさんの雲母さ
すぐぞ、ねアんのころさア、おきやアがれ、犬のり
の蒙漢じやア ねへ、ぐわあんまり呑ぞく志やア
げんな、生麦さまの、おとなしさやうな
まうちうけせうつらじて ちうの字もおとさ

ますひ **権助** ごすんよくコウよく物ぐつのま
てさへ、ねアんのころさア今時分、お稲荷さ
ぞあくりめへでゑひでゐる。めのう
ト女ハさうひきいひつゝのうこゝろきき五ツより所存さえ八つ
むなうかれらんともるをごん八その鼻をつまんで見なせば **権** 何を巳
ト男ハすくまれ八ヘ人のかこみ、これおもと見とくらうよらにみのうの葉
マのおごこたらいぞアあうのうをきさめてくどうきとも以くもう二中の
家内のくおつらくに
をくりして出てゆく **権** あひつらハ、ほんにどうだかの
つこゝにアねへと思ていやアがるぞ ト言ひまはり ねずみと
ぞうがんの六角ハめのきせる **男** こゝのふでござりますぞどうふ
みてたゞとかのんで

とありませぬ（トいふうちはさらな出る権八一人でのんでゆくさまで　おくにおりから二千六百のきをなりはやきの）

（あいしやのくるまにのりて六兵衛ハ光いわらしやくなめのハまちくどうのはらんと息六兵衛こ三のゆかた下着へちりめんのもんとこ三色おもゆかたんへとび八丈なくるみ三のえんまりはひへおきんどちやのつきずくるくすわこそうのお日待こーらくの日和さしせうらく八さんどの鈴ケ森のなかに入をいうそよふめう権八がおく乗りもとしそのねけここへりつて）

君大夫 モレ ちとおしつけ

すゞらおめくさんハお参りのかへにゆきぬいなの

おてさへャおんなふみの色いおそくざまなアト（かんえん所を）

（ごんハがかごをつくところ）権 こりやアおはやおがつてお

づ色ひおそやアおんのかのひよふうさ 長 なふ

さおめくおらくじおさんなとてい出なとよ（ト権八かごさ）

（たの家んからおてゐのすまい出いぞうのきせるこれ三かのとなふららいのおとこといすのかこ気のえるしぜているゆく権八もゆすそさみりくへあるし）

権 モレ それがりなからちをおすけずな

（ちうト出よつきとさ）長 さとつてやアト（さこくさ三ぞやまへたけそ）とくふ

今るへぜうらくおいてなきそろくこ 権 パイ 大勝く

まりの中九 長 おてくりでられなんぐざま 権 十二

つきてと出やし二つらごんな国まくへむかりやと

（トそれよりてごくひかえくとなせとくさくのとうせりあつてそぞいくはうりる権八もこれ見えより系まへがまりゆどくからあと）

（そのようすをみしもしらねころびありゆくびやうぶ　とそおくるうへこのものしれぬこととおもひ）権もし　おめへさんはどうちの方でござゐます　長わしかへ　ヤア傳通院（でんづうゐん）きんへんさ　権そんならおめへさんが、宮おやしきじやアございやせんか　長イヱそれはあの閻魔（ゑんま）さまのそばでさ　おめへなせへる　権ハイおらア[illegible]やア見せう[illegible]（きておよそひし[illegible]ゆくをなそ[illegible]　まくこれよりしんく御贔負にて何うる）長もし　あんとこれを[illegible]ござ、今[illegible]宿（しゆく）へどうかこのちくさ[illegible]おもしも[illegible]

つぷごとおふきそである[illegible]どんなぞ流行（はやり）ろちやアつまらねへノ　権そうさやアききやう[illegible]堂めしかせなひかどどとしゆう子　長なんかさおぬとうちやアりうとうなのさ、又むきとこへさめぐろうの、権なみ宿（しゆく）をやアどござりやせんか　宗[illegible]ふかけ出されが来ていやを　長何[illegible]　権むやそでござり、やとのさ　長おひらかせけ[illegible]あつりふ居るうらかどんなうちも数ハつれ

やろうハ皆、［艪］とつてやァありがたふござり
ましたとさふさえきます［伴頭］それハありがてへまは原さんじよのもて（ねとおとゝ船しものくろでゲコろたゆくなかへしぞくし）（おれの名まへとおもをざとき）（客扇などのハ皆たてこなかろかふく　これがくれて出けな）［客］カフ
うまさん息で吹室灰して下せへ、トさをみおみ（二客出てなおる）［艪］
モシ　そちらのやアがろうどざろ　やとよ［客］ハテべらぼうな
［女］まアどゆるりとおさんは［客］そしてかどを
二でうらのんでこせへ［女］ハイト（ゆくまのなくうて　こゝとうきぞろ）［客］
息ねおなぢらきのぞおりでおさんまと［艪］ひな

はやふかどこへいくもろめのろ［かご］ハイてつて
マァきがつらるんざでめんなさいほヲイ様
こそとおかとん紙二ッ（まもなくかこもてた　と二人ともふのり）［女］［艪］（かこの肉つら）
てやもヤァおせいさらけの［女房］さらふおら
どおくなもこきとんおふかどの荒執（このを）まずとよ

第二回

（ダレカラクリカヽリ）
夫遥ふ沖紙に漂宵、彼ふ出舟入舟絶ゑ

なく連（れん）として沖（おき）ふかゝり、佃新地（つくだしんち）乃
挑燈（ちうちん）たる〻ふ物凄（ものすご）くおちつく蛤（あごり）、鯛（じえ）櫂の
浦（うら）の七景（がうれい）りと顕（うこい）されハ山ハ一の宮鴨鉞（さふひよどりあ）
の仮宅（かりたく）ならんと忘られのぼせて通（かよ）ふ
数盆（おくりうへう）弘院おしかゝらヲイ〻の呼声（よびこえ）ハ難（なん）
義（ぐひ）なうぬ一元の西（ゑ）く、その熊谷（くまがい）の土手合
長（なへ）元利（らし）の小伝（でん）こふる十八丁、げふその
祭（ね）も宮（よ）し、宮崎（さんさい）ふ新（わら）ぱならべ、夕日（ゆひ）景色（けしき）ハ
信客（しふく）の包紙栗（くう）りと かこ モレ足脱けハ帰くハ谷
まででてさりますと子 捨 平の其ごゝハ、さぞく〻ふ出
返くからてそこせへ、かんかりふおんどんが出て
の うこ さよふならへ、ちよんとそふやませう
トひらのそのまてぶとさとのいちといふところでおきやく
さらふそしたらせるの人ちとりこゝの所ふるけのあることをり 菜蔵男衆
かでのあとからせいるくつのそまるかこいなふ
うらくよこつけふ待る二人とともふかこより出る 高尾源之
トきこう口上ふて
是ハ忠兵衛様もかふいらつしやりましたトあいさつしかくのおきむいてお
きやくさよふり遠いふさぢへうろてみさこちらへいらつしやり
ませとこ人のかこもみなくおかりえとふ一へ元気まする 筆曰

（きくみなしこてあつしふむらさんが部屋へ入るとふみをおとし ささやしめるおそひのおとおとてとりかゝりてあるべし）次（長きく とこて）あるき頼よふりうちあかいぼこ河へ権（こん）頼三郎おはを出さるゝがくへ権三んは黒（くろ）のらいてろうへめろうこよ（モレ）長さんあんとゑこふみえんらしこあへ丁よりえ出しかぞうりへりく（子）次（モレ）権（こん）さんえ出しそうりちちゃとありうとふこざりますよ（子）長そふさゑこれも南国（なんごく）のきめぐこのよ（トいふうち菜たえこがん わとさくさろはさいわろ）

長さんとむかしおめへのなかといちく坊（ぼう）神くな権そんなら八十吉（やそきち）と伴（とも）がよかろうよ次（さりふなうちてまわりきろとかまもかくわよくしきそ りぞこものめ出ろとかくうろそゆゑぜんふどゆふうち のセクれよのろてし むのうちろいしまう）次（モレ）ともきさなもちいとおもひなされ迷（トいふところへおむらさんが ふくまんめせろうろ出）宮あもさはしうんしいろほけてそしこれをとらせん出（トゆきときろ てなくろ）次（モレ）目あくこ（ありとよ）盆称そしこゆうふさろいそ志ゆきゆうごの宮（コヤ）権さんよふおいそうんしこまかんふおみく

げへとふあんじる〈梅〉ホイめらのやへかゐこれ

てきて〈皇〉それおみあんじハおろの弱くおくとく

ぞヨウリ〈冬〉あるさんのおみやけあちおくれる大

めりのやくら漬（ヅケ）る子モミ　梅さん江用事は存さ

いは八つくいのくいおちゆへとまひののてござり

ますよ〈皇〉あろうてろをろねく人へでぞ　ヨウトいふうち

ちくあのあくりあ出る梅へハおゑくが（みへ口もあのくるおさくそへふざりう）〈長〉むさとのハてろ

ゆゑのぐりし　子トいふ〈梅〉マタゆく（うくがあ身へやまんあるゐ　むくもたさんがよろろうぞ）

そうてえきまつられこれそろうち八十（八丁茶りまろと二ヶのうきて）〈八〉〈八十〉とれハ梅さんお

あくよふいらう志やりまして　トおもへあ（いさろとる）〈長〉モウ

とまりハきまする神（そでか）よふめく　トそれよりほかのそてあることの（うち八十八　おさくこまりの世）

りのちよ上にてあめをひたチヤチヤジト仕まう衣めあくおゑくがあいらく（花むらさにあるそ八九二ちくうみのうをいおうちよさへの花流）

あり八ろら色のさふねりやそそめんのうちろけ白ちゆきの下りと（りむくみへよろちまけろみのうくへかろめのそのえせのみとくつ）

んとおくやえ道ふよえくあそろハとと（ろハろうれどさもがさとぶりするなし）〈花〉梅さんよふおしで

あんして子トおもりおさでこまりのさくらにのむしよう（ありてをくいでる女あんでころてゆく）〈梅〉ホウやふ

とんちつとふきせるへどふてこの〈空〉ハイまく

のどがちとかわきますから子ト（れいのきせるをはな すゞことのとるすら）
（そのきせるがそのおとで言せるゆへ からきんちう ひかりをはなつてそこらのかゐるへんがひかりかゞやくと）亮ヲヤさとの
人アヨおいらんみいろはけよふやとんだうなく
なつくゆへじがおのそらのかゐるつらさきんどさ
よく（艶子ホ、）長カウきこゆうござりますイヤおいら
みやァめろうふでかけ奈良の大仏とりふ也
（ごトうれとれきまともふむらさきかちも持人を初買の吉之 ごきくもありまこれいのうんきちくおそろとせしがそろい）
（わづくりさあちぬ てのかそける）冨（がたふさうかてろむろが耳へ口がよせあの おいらんふえ年くおいのぞかんしとめてなる）
（とのひつけてやる まろきくひろふき）（からぞい 世くた但）ふむらさきさんおしよのしをさき
んせ子 小 あんさんもとちろともきとあんせん
ヨト（いくあちら来るおつへむらさき志ゆとふかおりらんのどふみさんへ と誹しがて手あけれひのわくこなりとうらむくでろうふて来る）
（あしをゆくとつていうりみんなのぶつあけいりてふらの母りあざとと べらぬかうえるとひたのゆへあいかのおあのつくなみえてようかし）
とあんあんしへ（ト志がやド世おけせてえふ なまりもべ系へ皆そ）ねしやアよのよおち
あんしし子ト（あいくろさそろふあうそくいかりてふけろうぞ どんみせがんふるせても中三ら頭へあるろうま）長モン
おいらんコでくぶひもとの緋をおそくかえふき
なまろしし子 小（しくてかうとうそれふろくしろくのとつくしいど あくるたむらさきのはつとのあさふ膳あるきう）

をくのごえせいひつひとつのくらゐせたせんにて出るとたくうりてくまなひ
あるひハろうちうを忘るゝもの六けのたゆへ業ひんたるなうらべてござうぜん
へんしゆ日もそ千年とうるとくずくさいまん八万円のきえんすめ功ざいとふ
おそのの中ところいのせん仏ちがふとて白さや此のきまんれを見
どうしてまうくところおこる手て来うくへ功ありてと大きうたるの
あはれあすりをうくしたゆへきてとれどこゝふわやくとをてあうさ
るうちひけ候うつゆくへさるそれくふきしたはれけ出でたひとおもいあつくる

第三回

夫（それ）仏説因果業報（ぶつせついんぐわごうほう）といふて前生（ぜんしやう）にて悪（あく）をなせしものハ今生にて其むくひありてむくふ

女郎にきうらハへでゝも傾國（けいせい）の名をえなりうたかた川竹の流（なが）れの里（さと）にも次第〳〵人のさかりはせたとむる客（とい）の心がらにて女郎ハつらく客（きやく）ハ又おめかく女郎の身のうくふ、なうさきれのえんの道をどつとめふくたいハなうるほど忘れども通ふならんとそめいくの催（さい）ふあらどかみな前世のまとことたなのしとそふ二（くひ死）

たおいらん三ッ見　ぎら屋のうり

若竹の見

はきやくいろくの会ハあれども見らうききれのさむらいにて三八二兵衛

とりなおがりありく○は三千世界いちまう　ヲヘ　とんごにろあ
つねに家のうちゆくゑよ君子ぞさんし
きてきてしがモウ　きそふみのゞ　ト（りくすうらいふく　つのて火へ出きせ）
るかいれてかたまりのせーがつうなゆへのかあてまれのわりきてまゆ
てまかてけむ家のけるんいまのうろ出まろくこるーふそこのでその也
わうちかむいて居るあんどうをまずしよかのぜーして行んとまる
ふりうろうつきまへくまれ分くにぞどかるーをとらきかれべ火
へのうちよふるゆく
とうてうだをいける　ヲキ　いめれはひきせろふゆふがさ
がつて居くヽ　ト　それ見てもるきところへきーしるがに
べちこいゑー物めくのてこしとこうけ御てもいとちや（がからきゆくらがのかせんとちやうれかまれ）
まんへうだらがひかまくるがまくこそれとのとこんでそ　ヲキ　おく
の内ア御すでまうらへせく　ト（りくなちらきそりあくこふ　のとうてわるからかと）

きちをふつこんだ大口ふからぞり　ヲクリ　からくめんど
うんてミてうせく書うるとえた也
あいつらァとんごちぢよふぞんかあてかきァ
がるはんふこん歌くふかきうてあんなは
けのからりいでんれ行へぜァのどがひりく
とまてきてヽ　ト（りふところへいらうらぞくくとそまるゆくへい　そりで床のうりくそのりてでにがうら）
きゆおまうく
とりうて居る　伴白（はとところのまさこの小冊なれへ仲のつかふくるが　かうのえーしたくれとふふ湯かや也ひ行って）
三味（どうかアえんで書うふ　ドかあけてえらり）　めしくねじつァ行なんーしとこく
ト　りもれて　女　行くこふりをーしてこび　くころくのゆく　みふいまあそよく

ねくだが、あんどころがさされていの見物がきされてく

［三ツ］ヨヲヤやうまんぜうにいつそきみがよる

うおもヨ［合］ならさゆわ六大臓（ぞう）のてうぐら

ひとりでなんかとおそるふうぞく

わけどふうこふうりちやア、三ツがしでもゆく

よかごこのト（いへどこのまへれむぞよ　へそんなゆくぶるなアん）アいつそりきも

ヱぞ［三ツ］なんでがらくおもヨ［合］いんかやヨ今

のゆめがヨト（まちち）と［三ツ］そんなあらあののがんがし

むやうでもかんしうく［合］おきやアがん

なもくかぶらくしいみうんしいゆがつくねんが

うぶきいて あさせ ラアト（いふるいまそれそいたそれを扇へえいりたこかのるを）

（いる会のもんならぜんようわかるの年にのむかつことえおしふとく　わうときすらうねしみとあれいむ孫のどれくふこれかるへせ）

［合］コウ三ツ花さんめちつところちやふあん孫くが

（トミつそまがからじこられつき　みふちのくと　いちるゆへ）［三ツ］あきさおはじめんしヨ

（トらのすなおてからじ孫ききりくと　まといたぞとぞのんを孫るゆへ）［合］（モどふぞしてーツかさんと与へ　どれりつこ六ゑまゆく）

こいるかん、まみん年て孫るこれおまかりさゆるおせめ国蔵人ご

てかくのこじとてさのつてこうもが女ふ郎おおめつれんとおめふん六

（去年のみちかおろ　とりかきとるきらるを）三ツ モシヱ　ねぶやァとんびやうハあてらの

んめふきんし、こことゝ紙おゑすれあれもる

（ヱトいふのハえらくえんくとひつこ一きひゆくおゐくとうらきみとれく　ふきろうけそかくのあうくしもそけのきんかとめぶそざふら目を）

女 そりやァねへのいふことゝどうらかどへめんせう

ちさその〱よりふみおゑふそら紙らくせて

らんみさんみヨトいふのハえあくでこたゆへありけてとそふ（ミツそるみも　いやみづら人の志ん子おんむく）三ャ

モシヱ　どうかをねへやァいつそうつきておさんさそふ

まことにハそれが志ごく皆らうふみァさんもハテ

（トらうるとと　へおきとる）女 とんどことゝがろりりハあんふみか

いちハくろうふかされるつもりハねへヨ 三ツ そうふ

いうきんとみそんおちつとこにが　るをふおせ

源さへどん紙およびあんしてかむちさ花さんの

あとをおきてきんしこヱ 女 きふさあつとそ

そふいうつけちやァ　ねへハナトそれよりもとし（いうそそべくいうて）

（あとハしづかにミツりんさろウスウの声そうろさきこ　やしきけのきんをさいめんよりのうろあん紙そらもとし）作者曰 とふして

（それがゆふやどおゐかりみそハいくそそみな円ちゆうのこかいのを　いみのらんときゑぬつろくするところとさと一く医ゆ出しとぞり）

おもしろひやうりとみるをあいこれでまつもゞりのあがとをらつとぞさうつさいいつの

第七回

艶道通鑑(えんどうつがん)曰(いはく)しな時の、人の公卿分(くぎやうぶん)の、色ふやごとなき深(ふか)き色好ろふあめふしてそとなからのやうをふあめるを、おそろしたちかいはしてに説(くぜつ)ふ女郎のおさそろうるいおのまはへとらぶるおめひらうへとの

てそくへとげねあとふかうかくとあびきねなうれくまろほうらみてむ称をとるしわいたゞふきどの君(きみ)のかかなげよりとふざのうへきゆへ露(つゆ)のむきをせぬ、むとさゝ女郎のあよりかけろまの君(きみ)つたふ不(ふ)器(み)なひそめてたまのさたのおかつくすもばかのきやくのあくさた、どろしわるたほくちおゝくとろくとわらひあうちかふ

かくしひがみあらんあるべきそのまゝそれ
みなこむくめのありがたきなくも女郎と
さながらしけるなるらねふれあらぞあれ
ともくさがひとさりあがつかなくて生涯
かくさうかぬ女郎もあいこれらの女郎へ
手段あんきいおそれともその色男の名誉
て約りうかどの一禍くことを生涯又同完
の醜名ちらして行かいる男女めのうまもひと
いうまことをおんかのなりおよそきせく
の名ゆかれ行うかきぐのねくこゝへりとよう
そのも色男ひとりをも袖くちりてそのいとし
さならとれねかうらこさあくのうへきもかある名
なきさくいとどせまれむのうちはよりぐとく
おめひあまりてかとちかくこふ袖のあかれさ
とねがひをするなれべきそくの身ふとりて
いふびんふおかふなれるがつなかがくなる名ひ

るろしくらんバ偕老（かいらう）のちぎりをなど
めづるなれバ、女郎のなくさみにハおほく又
まなのだへわきゆくのつとめにハ女郎あ
みそれいえんとわするることとなし、いさまされバ神
をあいはましなりん、魂（たま）より斯（とも）も後輪（かるわ）の
火やどる車の世の中に捨（すて）らるれのなら
ぜゝ籠（ちうく）これなおめへ てふまことあいのうちかそのお てんバなめおやいとおおい
らんあうゆうえのこの女ら生れつめそのうねれおそもこじよのあきゆく
人がりしおめへとてろのなだりとやうごふとの子てろくれバめきさみのくれん

ふねしやうあいしゆみちぞらきふなきんさきんねくくうきんあら まア この人今ハ
おらひなんしといらかうのなかうそのあやいとら家のうちあり しこのき
ゆくよろびさる
なに男とみえる 【おや】 それなをなんしふとんのなかへお
ちなんもとハなアとろちれおむれなんじ 【看乙】あや
すつくらいなせうながらむめてゆろうへむつ
せられるへ男（おえ）あらもむめて女るの女房にて
【おや】男めのかくひのをもらひきさどの、やがふる
りのしくのさァあくすうんをくら、おむれな
んしさみあうおさァナねじみ、きてァいそる

ゲおをおくゆめ逢とけくおりて免しく宮
とゆうく乙ヂァおつるこにのうの黒（くろさけ）飲
いるりが薮くいろことりふらへさひ
こぶ、おもが居へいろこさたへまくこきらる
んご甲はてておくんあんいぶ色さんが、ゆかべん
逢しておうたくゆの紙うけさとおつせく
しこすァほんとふおおつむくおいるん
せんとはくをどりいをおく乙これさよさ様
へかがちのめをぞ甲そァをャうそでおさと
がびせろかんどうせうねく虻て屑を
あんせんくらぜせひくこめせろ皃へぬしの
名すへで札紙のけねくちやァどふをコるるよ
おもかく乙そふさおもをそふ是ては扇
れど、ゆんりるりまくいつめのよおどくつま
ら給くのさ甲ァどうふをおれつてくのふ
そんおうてァどうふせうのふ乙どふさなめ

かほつこが様へハゆんかまぐてめくへへでくぶ

くめんがりしな甲フウ、ほんにおめへやァえん

なきよみなひ度胸（どうぐ）でおもへな乙そふりかね

そ一でも憎くおれかうとおもるやァ様くら甲乙が（くせ）

おつくとこそまうちうひそうりなえしても、どうなるもとかとうでま

ようでりんもうら乙だらぶうりかみト

（てつらごとなおつえん　かあみてごまりんでる）甲もくにどこぞつるゥあつせ

んくく乙すふとこをつるゥ様へ（ヲト　ゆそうふ　さもなる）甲

ぬしやァなぜそんなみかふかんをへぶらふも

くろうさんをうくそのきたあんをゑかゝ

あんしな乙ふさぐめくとへおめぐどをおもう

てめくの？へきなかうおいて意気（いき）なのなすひ

グーツでた様へのことあらどふとのあるへ原

やみへどんとかりへ夜しかなをてめくふ

わざされてどてのゆへきてとめぐよく

おめくべおどへ子日（もう）てめくへかもそうりくふ

いつれをせんさくしてみるにハあるぜんとと云ね
おれが足（あし）をよせんまくらとまつてみれバいつ
すでもうらく月見へおくらも行へ（トつらぶさと言 外ろうさ）
（いそ 言わ 外え共く）甲（モレヱ）あのこうすりふおあめのんをお
めへ今んがそんなあんなとこをいつ見して、
まろちく（アビ）ふあんせう子をして（ヱア）そのさ
がりへいくのなどありイも〜乙うおき（モウ）
い、どあそるめのか甲そんなきのよう

ことゆおつせへをないくらかどうらとへよふ
おとう（モレ）いくあんしあく乙それなどでめく
がりつてくよろえれどどふをあんまり甲
きのどくぞといいうんとのくへぞアるやア世のな
ふなきてうんもろちのことでおきと（リヤモレ）いくるんく
乙そんなうらいつふるどふを甲（アレサニア）いうらでさん
と〜乙今とて二十五などとあれバ孫への備も
け（せろく）ろ百まやも出きるのさ、おまよせん（それ）まぐらおんま

りきのどくど（ト舟の内でちくと思案）あや　モシ丑　それならとてふかど
うも出せるくまふだひくちらりとしあう
と、おりてしらくておきえし合がある
りいをくち、こ見紙てアつらの気し、ゆく
てよくめん紙きん面へ、ねしのことくぶを
のうとふもるめのろ（トよふ云足のやのちハさるひき出してひぐどん袋く入とこ紙の込んで）
（きとこあくをひつけてひみやうて手て形も寄へなあり）乙　ゆんふアてめへなつとやアこそ
そんならおりてころるそれハ出ろ、あや

そふやァそふとかんかねしやアマろうち紙よ
んでおんそえをきょく　乙　此ところでぶぐ
ちふすつこせ　あや　それでのモシねしのきろ
さんやめさんが、ふせうちな時へどよまんせう
鶴く、それ紙おりやと鶴かこふおもョ　乙　それ
よりまく気が丸一年に月とりかめのごカ
り、その、うちかへ、そうちふとんごとどが出
きるごりふ　あや　よくつりてみるえし

さよのよ月らゞこのくこころもちがするのさ
めかをはぬしのくわかをころへと帯（おび）
くあたられしてをとのきられんせん
めのはうかんに悪縁（あくゑん）でおろせうョぬしを
そふおめりておくれるにおもさまなすん
をまもなくこより を入れまふエ 乙 これ
さあやまつくらよ、こんやむせうふねむ
ひかれらさどこは吸付てくアるやてめくおれが
ことぢりそんなふりのがおもしかせとの
こて後へよかなおとは縁をるるヨこんなろ
うひ白はおをきかよろうちやアしまら
後く おや すぐそのきうふうろひきんを
くらはらくてゆびの二ぶやたまへいく、
せん 乙 てめへふもびをきつてめらつさ
とてきはは付てもひてのくるれねへ おや
そんなのらぜうかされば、かくをおれつてかまう

乙 なかゝあじな恋をはなしてこゐらしく出

こむことをそらうぎきこくさうきそとみ河

つくえあんぐ あや あァやァはじまえ、土地（とつ）の

めらくにぜんもくら、あまとしふ町くらめら

りんーと仕切場（しきりを）ゟおえんもくら出んせう

うくそりつあや まる世への小柄のかく

まるので、茶ぞうみ志要ら あや これくええく

ぼんくとうきこ（なせう）みするうらの業（げ）

けせんが、一ぜんとせくてこくせく（ヨトらつける）（ヨナのくせ）

（んもあるあやいとのわゝのきなくからべこのゝおまの）（ぐてすみのひがあくぞくひよふじやつうのなうら） あや （もとく）福こ

あびなんしな 乙 め出がくうて、おれかねくら、

はふなるごあうのおらし年（うし）よりす（うぼ）ふちう

となりてく、ておあるがて、めくまうているら

あや （ちとされくて）（そこらのなうら）なんさんもとへおらら（まうせう）

サアめへ福なんしく 乙 そんならおかうら、

おびがとめて、福しててくても あや （あくい）

ろくなおとこはけいせいきんを（トいくたびもむかしからのさがお　びんとみてびやうぶかけた）てまへ　それよりおとこはおさむらいのとうりうでさうにく　評曰　それおまへがいはゆる浮世の花るこゝろのあるひはつらにてしおのうぬぼれより出きたりとのいふんのふあらぬぼれ出つとびて　きみまくらものゝふのめのさしこみんへおとりみ人二情ありあにとらせいのきみく縁からみなうぬぼれから生まれてそのところくるひののねをみさせるものゝうつしこゝろあくうぬぼれく

才太田

こひ（恋）せしとは人のふかきなるほどに、と縁（よそ）くる人情（なさけ）をもるとりふこその餌（ゑ）にて、遊（やう）びるめいくつ

らくるひせよそのごとふあらざ（とてふみ一なきのさへ気権八が　宗のうちへ今までのせうひとつ）かりのにさおすそのものとけんなそれとのものゝ権八がりんおもくおて紛実のへかりにさうそく紙にまきそうあめてとりて居るゆくなるへ

小紫　モシ　ぬしや（アヽア）どことぞかへるふおさんせぬ

モシ　とろちふはおもひなさんしな（トいゝながらあちふはむかひて　まうえんゆくてきよへのかたさく）

権八がまへのそうくおかり　モシ　ぬしやさぶとちあんぞおきふみさへり

んしことどがあうんせうる子コチデせうされを

かちきさんはおなかしなんしな（トいひてどうやらそうで　んすりなく権八が）

かそくうたくちちながめくまぶ　らくあつてあとうちをところで　たとへろうちがめのてとおい

きことくきんせんとゝがおさりんしてもおせぞ
それがそふとおつきんしておくんなんせんで
だまつてぞろりおりてあんまりどおかくを
へゲめし中とおもひませんでかゐまするおさんを
（ト あつらうとどめあどけなく ひたんがえぐるさのへ八え）**権** （さむらうを見にふりむいて笑ふが間が のらきみの顔をいひをきうらがとう てぶち のひく）あんぞといやァがるめのごとふりたと
どうねへ、ことゝりあまらいつてくれてえ
ふちやァ目とことふくらる、どぜんせめおいら

アヽ今だやァおれてむかしとをあかして語れど
（ナとのところを 辺ふとくふせ）よめくゆくわせうへ大きくつまら
ねへ、アヽこれがよくくべかにあまんのれいゐんが
いまこの身におくろてあまくと目がさめるとこ
それとりふのもみんなとろちのひりいのふァ
むまみうま世の中じやうゝくおんふをりくおやく
（ト まくと泣きひえたる顔におかく ともーとこからおさこここにて）**小** かんふおまくさんのお顔
のうくかまんじつ、泣きの円のおそーさんうけて

あさゐるんしとげとれハ志ァせんなんホァかけの

九しゆでうし弁の火大力さへきふくつてんとれ

ナどてふぞモウとせうさんとおがみんとうらき

それ故およてげうひかをておみせなんしてさ

さくしふう色くちりておくれなんしてァ

あの御市づらがことふつ九ぬ匹ホァおそ匹

中なんとてとぶてきんしふよ（トらうまちをとりふおら しくてとうおひのあれ）

（ころ紀みをかくへりんで死の見匹かくしかみなでおけてモし立 モしヱト志へぶつおかりてふあちハ色てうとちなくとぞなけれなり）権

（モあちさへのかれちやくてへいろくてんハこふざるうのくさまが 岩城ふあちざれバ伝市ぶてくのひさ匹なしぶ紀なし）コレ その

伝市がとうふ吉くのぐこ 小 それなうきりん

ぞなれてねきてうんとくかんふう色なう

おさんを（ヨトきちふにつ とつひらぬ）権 ふせうぐら伝市がてと

とりなうきひてゆるのぐ匹てよめくハ

伝市がおうくいれてくとりかのでそんな

ふう色ーぐるのら 小 あをさどふりくハと

うりなとってふらひにぐのう 権 なぢら

ぢうぢうやく、どめのふくひはみへずれがしぐ
そして女房がどふまことのござりやくらく
きふかゝつてまりいまく小（とて）かて、（ア）おきて
あんしおのとふらねしふおそるしやま
んとゝふり女づらがかることしさまうけ
まんせうとかふまんをとよめやくと、お
てまいしてこがおのふくらしひつまくら段
どめんして、こんがうらぶらく、からぶらだ
て床んをと（サ）それで、ならておかくのつもあられん
おておふ女のまんと申らをいふめみれしてござ
千鉢、身らけしてい、どをいお申こ申らで、そへせ
こひと、おかりて床んをと（ツサ）それでこんちう
うら、そてのうりくきんしてころ兆さん鉢、あ
なんしてとらま込ふさらこうのなひのなをさ
んまう、菊の（みる）深まへどん鉢よのびんしておふ
かいろくなるまんしこ（ツサ）それふ（ア）そのとけ

のしんとやらがころゑさんにすゝめひんして
むせうにおしやれちらくきんとッサそもそく
そろゑさんのきんじつで寄ふつろちゆおよ
ひきんしてあたりをゆかくおさまなんしておく
んなんしくぞそれでねしがおりでなんじくゆ、ち
つて居イしこぶつひおそくあちんちく 橋
ヱヽなるほどろくいりすでいりてもかゆつゝ
ちワうらねへハヱそんあらなんといふさるゑ
さんのとけへおふみのきんがあてかよめく
をとろくとかんくらくふ座ちへやすでよび
よせてかめへのたましゆきてあかけせう
といふところがとふごそちふりヲそゆりろうぞ
うらねへせつごさゝ（よおきくせきこでる）小（きよきさめて）そふで
おさょこひょうとそふあらちんしたらおあ
ちやアヽヽどふきんせうねト（ばれハよごえけく）橋（レテモウ）
ゆくちせうでかよめくゆきんでちましがあろ

とこ小りんへすぐひるのとうておもらうぞ
なしろ、おろせんがモウさらわーおつせうよ
権（ゑんまよくうらの座の うでてうでくさかで）たそ每アモウうろくとふー
ちやアひら色新くへ（エトとびさつこむけらあ のきかつので志多るる）小てきふ多りて
そんならいつそ五郎のどあんをつかとれ〳〵
てあゝのうたやふげ権（とりくとよむらされが 足ふ新あてふこ系そ）あん
の女ろあきそうゐどふとのこみたおきが
むら新小それならねしやアどふりふてあらけ
んでおもそれをきかせておちつかせてあく
んなし（エトちがうてをぞ もむ学のあい）権（どろくとよってびやうがやあけ あくろ新つえちやーふ葉ら耳くに）と
ゑよくきかけいどふであつちやア今ひらでこの
権八ふかゐるあり色つきてゆくのはあまてこと
とおそうあろうちやアてめへよりとのあきが
うかがふてね〳〵モウとふあろうちやア百年めぐ
してその外の志んはあさそうそくいろ小アイ
ゑうそれさんがあきういうでもないいと

おつせしく梅ム、さひつのひへ、そんあらり
そあその軽（あさく）とけのまんめ孫人、まりもぞ小
どうまうんを梅むそく（ごく）、おつてあるとへ小（子マリトおん　八がロかくえ）
（てかく　みがら）それからあとへどうふまんをく梅そうもと
てやァまくと於帝めもあり什つ人合せぞろつさ
りとこめ世のいと貞、そーそ右の女のまんめが
くりひ仲ふへ、らーり不合がフム（モウ）あんふもむ、
んどるな小（さもが女のむ孫せまくそられそ阝にれてくそかきてね　じでがめくじて飛ろるがおつとふつれな女きゆへね）

まやァそんならあとのはさへかわゆうおもと
りく梅ツウサ、そゐくいろ孫ハ、かつもろがろり
いァくたつるやァそうとふはぞくどのみかぎり
がるるひが、そ乞てもどつてふも、まるくさがねく
おきくへいくゆうふひつてくりや小そり
やァくくーが、のここみイしく、それてもテァち
つと、おゆとをあんしてもふおあろせうとと
（てとこのうち　へひれとめだ）梅なこうぞうめくかづらじそふみ

きんのこゝろ（トいふうちに障上下のかげコツニくゞり）権八ゆびがへ、お
つてきて、おもての戸をあけセッちうきその
そゆくけゝろく小（ヤよふえさのひきだしからちよきと　ろろをひや出てきせるのおれと）
（とゝ遊　ふうろう）ゆんかねみよりまきかみつけあんしてけ
ぐをゝきうぞ、あかんをさく（ヲヽモ）りつそくろう
さんそのふせてヤりつかうりで、あんそく権
あゝりてそのかぞんふとよふり（十二人りともふ　ろうすくいで）小こ
おくかづめどん（源がそつくと　おきみきかり）源これは権太ゞと

んぐおそゆうこさりまする（子トさらへうつそろしとを　おりるをとよりニ入り）
（だんこ）く源ヨイ源さへどんおくりがある（ヨ源さんへふでん　とそねのけと）
（こいの　ろゝめ）げんじひぶけさぞ、とおさむろうござりま
せ（トあのさかおもらおくみそのあをとりて　ききでつかいとーより　ろものかまかひらひとつのそりるかききやおーし大きなるちよふ）
（さひんと付けてり　くゝらく）権（カウ）源さへどん今のそくはあさう
てあぞんかどよゝうとりうそくせく源さ
よふあうはそくふおろくりあされますそか権
ちうといそぐからよるめくヨげんさよふ

ならおかどくおてうちんでもし 詞 みすふあ

かえやせうへてうちんをもくまゞ 小 モヨフセ

んなうらなおうもヨ けん さよふならかれきけ

んよのふ（トのろとゑふてりこふらく ひろきやりぢよのかへひん八） 序曰 （とのところどとろ 住ろ子也て太木穴）

のうくりふあろりおん八とく妓のあんがしとてのあらん和るるが丁数ののびる

ちく往へんふこれ物也をいまのくりのおとふゐの処て国外さ宿

をの六国くろくくりのきやくへみて

これ由せうやうきゆくあうの男 太夫 ウ一八とのひ物なおら

いづあろこみー のひくりをを わんふとんどおつるゆめ物そく（そぶ物つえんばあふ）

ぜくきのふひよく塚くまりつさとくろいし

ろ 詞 八ぶ ゆめうしろけろかえそおなんのゆ

めうろけろ（トもしえ グてそ） ゆめくうくうふことゐ

くりでごおうりあの物まつゆめくしひちぢ（トむ すむ）

（みなちし処ておるゆん志るれ物りろてゐる のれ南一ゑの大ろふるのせうひとうゐる） すぐそゆくがおもし

ろく物くうちどくらけくろさつく（とろく処 てゑんのへや）

（せよびおとをゆへ物ど多く也妓や七等出てきうりお妓へ ぐるあんでゐてりているゝ前へおひをおつとちそう処めて） 七

あを么かるろの 左 りまへふら物へがさ

つきふうさヨ 七 （ちとちいさ ゐとくぞ） ゐすさんひきゐ意（さうぐく）

夜あけてきこゆがすぐにおりちがろうどんはあく

らく（いきそくむところのおかるが これみて一スリののくまれたう）□右□ みふモウそんな

みそをカァ徐くとどうしたがせくらせ（ごとでる をゆくのう）

（このみへれつよりりえん でもうあれ出るゆくなり）そしてあいらへちろつとえん

らがもえやどで目がカマイご（このきゆくさでわ まんでうののとくく）

さり サァいかうく（トむこうふあるたろえ夜のぞへてこれど なみゆくころきのりとでそなあひ）□右□

そんなうらいかうハせるあびがあつれるせく

□七□ ヨイ サァハ北中せう（トこへせものふもで どくとくえんく）□おそ届□ □おりき□ そん

あらこともひどふあく（トあまとけや七ぞうがせくへおそれしがうを もけう せくハおもうともとうふそこれ）

（パすつひさあくくされこと又くろとうひののくてさ をあけてひめでくくほてあるそうぶみどみづら）□家老□ こゝのふみ

らどなくこさるなとれにきえんをのふがちんなる

ひんとく

假廓 南渚 比翼紫

自跋

予(ワレ)嘗(カツ)てとしもゐ
て小冊(サツ)を選(アラハ)し
よと其文(ブン)拙(ツタ)なふ
しくる中窺(ウカメ)る
屁(タツ)以しゆ(コト)しむ故(カルカユヱ)ふ
諸(シヨ)君(ク)子目んと紙(フアイ)で
さうしれど見るも有乞
唖(ア)呼一ツ(バ)ば(カ)か屏
とふ頼(ヅラ)ぐ屁(ヅツ)がいめき
れすと屁(ヘリ)ひぼん
まつ(カツ)く屁(ヘ)れしかり

附(ツケ)んつゆそ思(オモ)ひとて
頬(ホヽカムリ)い廓(クルワ)ちかき処(トコロ)へ（ソツクツクツト）
遣(ヨコ)しらせ置れん
――とさゝふ

宇田樂庵誌

みやがわ

い5436